

昭和30年代ころの水神河岸  
(千葉県立中央博物館所蔵、  
故・林辰雄氏撮影)



成田  
歴史  
玉手箱

●26回●

歴史と伝統文化の  
まち・成田。市内に  
は、歴史ある文化財  
が多数あります。

印旛沼の渡し船



## 人々にとってかけがえのない乗り物だった

交通網の未発達な時代、船は、近隣との交流・人や物資を運ぶ交通手段として大変重要なものでした。成田には昭和43年の甚兵衛大橋の開通まで、印旛村と結ぶ北須賀 - 吉高間の「水神の渡し(通称甚兵衛渡し)」、鳥居河岸 - 花島(平賀)間の「下方渡し」の二つの渡し船があり、通勤・通学、買い物などに利用されていました。

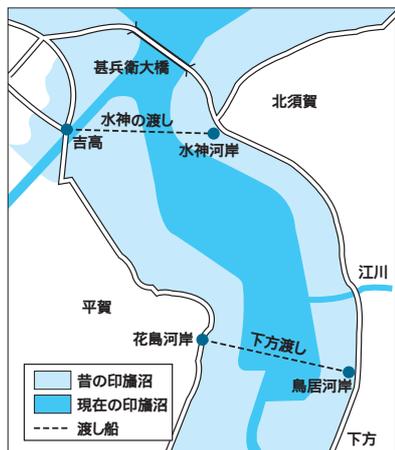
渡し船がいつごろから運航されたのかは不明ですが、明治9年12月の吉高区の文書には、木下(印西市)と成田間の郵便路線を確保するため、吉高から北須賀への渡船開設の許可を県令(県知事)に願い出たことが書かれています。渡し船の開設時期を知るうえの一つの史料です。

一方、北須賀区にも、昭和10~20年代の水神の渡しの営業について知ることができる史料が残っています。それによると、北須賀・船形両区の協議会と六合村(現印旛村)議会の決議を経て、北須賀区長と六合村長との間で渡船場営業契約証が取り交わされ、渡船に関わる認可を行っていた県に、代表者が申請し許可を得ています。また、船頭は入札によって選ばれ、落札者は村や区に運上金(権利金)を納めること

で、村が所有する船を借りて営業することができたことや、月々納める運上金を2カ月滞納したときは契約を解除、保証人が後を引き受けることなども書かれています。

当時、渡し船から得られる収入は、区の貴重な収入となっていました。昭和20年の北須賀からの乗船数は、大人4,986人、小人(7歳~12歳未満)1,530人でしたが、運賃は、人以外にも自転車・荷車・貨物・牛馬など細かく設定されており、船には多くのものを乗せていたようです。

渡し船は、客の集まり具合を見て船を出す、とてものんびりとしたものだったといわれています。しかし、夜間や沼の増水時にも船を出さなければならない船頭にとっては大変な仕事で、どこへ行くにも船だけが頼りだった人々には、かけがえのない乗り物でした。干拓によって沼の形は大きく変わり、昔の船着き場の面影はありません。現在、地元のみなさんによって大切に守られている水神の森が、往時をしのばせてくれます。



成田市と印旛村を結ぶ渡し船



大正時代の水神の渡し(「宗吾名勝絵葉書」の中の1枚)。渡し船の先に見える高瀬舟は、昭和20年代まで見られ、利根川から長門川を通り印旛沼に入っていた

### 編集後記

どこの市町村でも頭を悩ませているのがごみ問題です。本号でも2ページにわたりごみ処理の現状を載せましたが、気になったのが「困ったごみ」の部分。以前、現場を取材したときに、注射器や針、農薬・塩酸・硫酸などの劇薬類

のいったびんなどを見せられあぜんとした記憶があるからです。担当課に聞くと、いまだに「危険ごみ」の混入が後を絶たないとのこと。ごみ問題の解決には、まだまだ捨てる側の意識の向上が必要のようです。